

# 技術者からの視点

## 第6回 技術者と職人

藍野大学非常勤講師 木下 親郎

### チェッリーニは現代の技術者の 手本となる職人

イタリア・ルネッサンスは数え切れないほどの芸術家を生み出している。「もの造り」という眼で見るとベンヴェヌート・チェッリーニが思い浮かぶ。彼は彫金家として名を成し、王侯・貴族・豪商から多くの注文を受けた。それらの傑作はヨーロッパ各地の美術館で見られる。同時代のヴァザリはその著「芸術家列伝」でチェッリーニを常に彫刻家と呼んでいる。チェッリーニの最も有名な作品はフィレンツェのシニョリア広場の彫刻回廊（ロツジア）に置かれている三メートルを超す青銅彫刻の大作ペルセウス像である。

チェッリーニは六〇歳前後になって自叙伝を書いた。家族、弟子、親しい友人、仲間の芸術家、さらには教皇や王侯貴族などのふれあいを記している。口論、乱闘、逃亡、投獄などの事件にあふれている。

彼は一五二七年、カール五世の皇帝軍がローマを略奪したときにサンタンジェロ城に教皇軍の一員として立てこもり、包囲軍の士官を鉄砲で射止めたと威張っている。この城は歌劇「トスカ」で歌姫トスカが屋上から飛び降り命を絶った舞台であり、オペラの好きな人には良く知られた場所である。ローマ略奪は世界史のなかでの大事件であり、彼がそこに居合わせたと思うと歴史が生生してくる。

後には教皇の怒りを招き、牢獄となっていたサンタンジェロ城に幽閉されるが、処刑の直前に脱出している。扉の蝶番の改造や、脱出用組紐作りなど職人技術を駆使して準備を行い成功した。スタンダールは小説「パルムの僧院」の主人公を囚われた塔屋から脱出させているが、作者の脳裏にはチェッリーニがあっただけであらう。

ゲーテがこの自叙伝をドイツ語に翻訳している。ゲーテがこの作品のどこに感動したのかは知らないが、私は、チェッリーニは現代の技術者のお手本になる職人だと感銘を受けた。

### 「もの造り」に最近の技術者は 責任を持つているか？

この自叙伝には、もの造りのための周到な作業計画、具体的な段取り、品質目標へのこだわり、弟子の厳しい指導、経費の見直しなどが詳しく書いてある。気難しい芸術家というよりも、職人の人間的な苦闘の姿にあふれている。いわば設計から製造まですべての過程について責任を持つてもの造りを行っているチェッリーニに親近感を覚えたのである。

ところで、最近の技術者は責任を持つてもの造りを行っているのだろうかと心配している。不具合が発生すると、新聞・テレビは管理者責任を追及する大合唱を始める。会社幹部は記者会見で「不具合発生の原因を徹底的に究明し、今後このようなことがないよう

に厳しい管理を行います」と頭を下げている。その結果、担当技術者は大量の検討書、報告書の提出を要求されるのであろう。適切な管理の手段としての報告は必要であるが、その量が多くなりすぎると、肝心のもの造りのための作業がおろそかになる恐れがある。

**技術者を現場から遊離させる恐れがある過度の報告書作成要求**

私が部長であったとき、所長から「何故報告が無かった」と詰問されたことがある。ある問題に関し、顧客幹部から常務に質問があり、常務からの問合せに所長が答えられなかったのである。私は「発生したすべての問題を報告している」と仕事が出来ません。重要な問題はすべて報告していませんので、報告していない事柄を尋ねられれば、それは所長が知らなくてもいい程度の現場の問題であると答えてください」と言った。当時はこのような問答が許される時代であった。チェッリーニもそのように応えたと思う。組織の構成員は、共通の認識を持ちお互いを信頼しながら仕事をしているのである。管理者は部下の仕事の邪魔をしないように配慮しながら、時間があれば現場を歩いていた。書類よりも実際の仕事を見ることを重視していた。管理者から報告書作成の要求が過度になると、管理者が望むことだけを記した報告書の書ける技術者が重宝される恐れがある。そうになると技術者が

書記になり、もの造りの現場の実態が分からなくなる。

**技術者にも職人にも共通して求められるのは全体構想とその完成**

昨今、手先の器用さとか、目先の新しき、作業が微細であることなどを職人芸と呼ぶ風潮がある。勿論、職人芸の極致といわれる匠の技は高く評価されるべきである。しかし、職人には作品全体を取り仕切り完成させることが要求されており、職人芸はその全体構想の中で造り上げられ、洗練されていくものである。職人芸的なところばかりを強調すると、作品の機能が矮小化し、極端な場合には全体構想が満足されない恐れがある。技術者にも職人芸的といわれる人がいる。しかし、全体的な展望を失うと、得意なところに閉じこもった、有能ではあるが特殊領域の作業者になってしまう。技術者と職人に共通するところは多い。

**職人としてのチェッリーニと芸術家としてのチェッリーニ**

チェッリーニの自叙伝に感激した音楽家にベルリオーズがいる。彼は歌劇「ペンペヌー・チェッリーニ」を作曲した。実際はトスカ大公のためにフィレンツェで作られたヘラクレス像を、ローマで教皇の命を受けて作るという筋書きにしている。鑄込み作業の土

壇場で地金の不足があきらまらなくなったときに、地金にするために工房にある彼の傑作をかき集める姿、弟子との関係など、バロック期の彫刻・建築家であるベルニーニもチェッリーニの職人振りを強調しているように感じる。職人さを感じさせないチェッリーニの作品がスペインにある。マドリッド郊外のエル・エスコリアル修道院にある等身大の大理石彫刻「キリスト磔像」である。自叙伝には、サントンジエロに閉じ込められていたときに夢に現われた像を形にしたものとする。夕闇のせまる聖堂でこの像を目にしたときには偉大な芸術家チェッリーニしか感じなかった。

**P17のクロスワードの解答**

チ	A	1	ベ	2	ン	3	ウ	4	マ	ト
ヤ	B		ル		ビ		コ		ド	モ
レ	C			6	イ	7	ラ	8	ス	ダ
ン	D	8	ア		ン		ウ		9	ハ
ジ	E		ミ		10	ミ	ジ		11	ユ
		12	ダ		イ	13	ヤ		14	シ
			ナ		15	ゲ	イ		16	ユ
										レ